
魂を奪うもの

間宮冬弥

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

魂を奪うもの

【コード】

N1643E

【作者名】

間宮冬弥

【あらすじ】

青年に声をかけた少女はその青年に『魂、頂戴ね』と言った。震える青年に少女は容赦なく魂を奪った。だが、その時、上空では魂魄管理局の死神がいた。

第一幕【願いの代償】

「こんにちは。お兄さん」

紅と蒼の双子月が照らす夜の街を行く一人の青年に十五歳くらいのツインテールの少女が話しかける。

「ん？ 誰、君？」

二十代前半の青年は話しかけられた少女に近づき話しかける。

「メンドいからさっそく言うけど。魂頂きますね」

「はっ？ なに？ 魂？」

青年は意味不明の言葉をかけられ繭をひそめる。

「使ったんでしょ？」

白いワイシャツにネクタイ。黒いミにスカートのツインテールの少女は口の端を吊り上げ青年に訊く。

「なに言ってるの？ 君？」

「覚えてないの？ しょうがないな。それともトボけてるのかな？
ふうとため息をつき手のひらを額に当てる。

「あなた、『願望機』を使ったんでしょ？」

その言葉に青年がみるみる青ざめる。さらに震えが起き小刻に体が振動する。

「な、なぜ……それを……」

「あなたは『願望機』の能力でどんな《望み》を叶えたのかしら？
目を細め男に冷たい視線を送る。その顔は小悪魔みたいでかわいい
が対峙している男にしてみれば悪魔のそのものだった。

「まっいいか、どうせあなた死ぬんだし」

「そんな……話が違う……待ってくれ……俺は！」

「言い訳は見苦しいよ。『願望機』を使い願いを適えた者はその代償として『魂』を神に捧げなければならないのに……あなたは捧げずに逃れようとしている」

少女は『おいで……月詠』と呟く。少女の手にひらに真つ黒な夜の

闇と同等の漆黒の闇の玉具現化させ手のひらを返しその玉を握り、そして潰した。

真っ黒な液体が地面を覆う。そして地面を覆っていた黒い液体がうねうねと動き棒状にゆっくりと重力に逆らい少女の手元まで伸びていく。

「な、なんだ……」

まるで、悪魔の儀式を見ているような感覚に堕ちた青年はその場から動けず、その光景から目が話せなかった。

「逃げないんだ……まあ、逃げてても無駄だけどね」

黒い液体を掴み一気に引き上げる。黒い液体がボトボトと零れ落ち少女の手には刀が、銘は月詠つきよみが現れる。鞘を右手に持ち替え左手で月詠つきよみを抜く

そして刀の切っ先を男に向けて言う「あなたの『魂』を頂くわ」と

「オレは……オレは……《願望機》の能力で《願い》を叶えてやっど……《彼女》を手に入れたんだ！ こんな所で死ねないんだ！」
手のひらを少女の向け下級魔術で生み出した炎の玉を放つ。少女は冷静に焦ることなく右手を大きく薙ぎ払い炎の玉をはじく。

「なっ……」

男は驚愕した。少女は下級魔術とはいえ炎の玉をはじいたのだ。しかもあつさりと。

「《彼女》……そう、それがあなたの叶えた《願い》なのね。でも、彼女自身は納得してるのかしら？ まあ、その《彼女》にも、もう会えないか」

冷たく、冷たくさめた目線で男を眺める。

「死ぬ前に見せてあげるよ魔力で生み出した炎よりも輝き、神すらも焼き尽くす煉獄の炎を！」

少女の右手に炎が宿る、蒼い、蒼い炎が姿を現す。

下級魔術で生み出した炎は紅い炎、上級魔術で生み出した炎は黄金となる。しかし、蒼い炎は魔術で生み出した炎ではない。魔術で生み出したのならそんな色はしない。

この世界にありえない炎。だが、その少女はありえない炎である蒼き炎を出現させた。

「さよなら」

男に蒼い炎を宿った右手をかざす。

一瞬の閃光。そこでその男の一生は終わった。断末魔をあげる暇もなかった男がいたであろう場所には男の姿は跡形もなくなっていた。血も骨もすべてなくなっていた。ただ何か焦げた匂いが残っているだけだった。

「さてと……」

少女は手にもっていた刀を月詠つぐよみを鞘に収めそして右の手のひらを宙に向ける。

手のひらが光りだす。正確には手のひらから浮いた場所から輝きだした。光は手のひらサイズの魔方陣を形どり、その魔方陣に導かれた光る蝶。魂が姿を現す。

蝶は魔方陣に近づき、そして、スウーっと消えた。

「完了ね……」

手のひらの魔方陣が消え上空を見上げて《ふう》と息をつく。

その瞬間、彼女は吐いた息を飲むこむ、上空にはセーラータイプの黒いワンピースに黒い漆黒の翼を広げ一人の十五歳くらいの少女が浮かんでいて、さらに目が合ってしまったからだ。

(あの大きな鎌に漆黒の翼……『魂魄管理局』の死神か……今の魂を奪うところ……見られたか)

二人の少女は沈黙のまま目を離さないままだった。ツインテールの少女は不適な笑みを、翼がある少女はバツの悪い表情が濁った。顔をしていた。

「あ、あの……い、今……魂を奪ったんですか？」

沈黙を破ったのは気の弱そうな漆黒の翼のある少女だった。

「だったらどうするの？」

「だつダメですよ！ 無理やり魂を奪う事はいつ、違法ですよ！」

多分、怒っているだろうが気が弱いせいかイマイチ迫力が欠ける。

「じゃあ、あなたはわたしが魂を奪った人が何をしたか知ってるの？」

「そんなの知りません、でも、あなたは魂を奪いました。それも……『殺す』という最悪最低の方法で！」

眉一つ動かさずにツインテールの少女は「あの男は『願望機』を使って望みを叶えたのよ」と死神の少女に言った。

「えっ……願望機を使った……」

「だから、奪ったのよ。死神のあなたが一番わかってるでしょ？ 願望機を使って望みを叶えた者は魂を死を司る神に捧げなければならぬ」

「死を司る神に捧げる役目はわたし達死神のはずです。でも、あなたは『死神』じゃありませんね」

「そうね、わたしは死神じゃないわ」

「じゃあなんで！ どうして、奪うんですか？！」

語尾が荒くなっている翼ある少女を見ながらツインテールの少女の口が吊り上る。

「あなただつて同じでしょ？ 魂を奪うって事に関してはね」

「ち、違います！ わたし達死神は決して『殺して』魂を奪いません！」

さらに怒気が強くなるがイマイチ迫力に欠けている。

「方法はどうかあれ、最終的に辿り着くのは同じ『魂を取る』よ。あなたもわたしもね」

ツインテールの少女は翼ある少女に右手をかざした。

「もう、行かないと、じゃあね、死神さん」

その瞬間に手のひらから蒼い炎が浮かび翼ある少女に向かって放たれる。

「蒼い……きやつー！」

閃光を発しながら襲ってくる蒼い炎を空中でさげその反動で体勢をくずした。体勢を立て直した時にはツインテールの少女はいなかった。完璧に夜の闇と同化してしまっただけで見つけることは困難だった。

（死神が来たって事は……願望機の魔力を感知したって事ね……でも、感知できるのは願望機に対して一人だけ……あの死神だけ）
夜の街の屋根つたいを疾走しながらそんな事を考える。だが、その思考は長くは続かなかった。

魂を奪うもの・第二幕【魂魄管理局】へ続く。

第一幕【願いの代償】（後書き）

お久しぶりです。間宮冬弥です。

最後まで読んでいただきありがとうございます。

今回の作品は一応ですが三話完結で考えています。近いうちに第二話を掲載できると思いますのでその時はどうかよろしくお願いいたします。

では、短いあとがきですがこれにて失礼します。

第二幕【魂魄管理局】

「ま、待つてください!」

後方から近づいてくる気配に気づき横目で確認する。

「ちっ、追ってきたの……」

ツインテールの少女はさらにスピードを上げ漆黒の空を駆ける死神の少女を地上から振り切る。

「お願いです! 話を聞かせてください!」

死神の少女はどこからともなく黒豚のぬいぐるみを取り出しそれを思いつきり、前方を走る漆黒の髪の少女に上空から投げつける。放たれた黒小ぶたのぬいぐるみは背中からこうもりの羽が意思を持ったかのように加速し少女の前方に回り込み、そして、顔に張り付いた。

「ちよっ! にやによ! きよれ!」

突然顔に張り付いたぶたのぬいぐるみにびっくりし舌が回らずに舌足らずになる。

「追いつきましたよ……」

死神の少女はツインテールの少女の前に立ち『もういいよ。ありがと』といい張り付いたぶたのぬいぐるみを取る。

「まったく……おかしな手で逃走を止められたものね……」

ほほをさすりながら少女は眼前に立つ少女をするどい視線で睨むが、死神の少女は一瞬たじろいだがすぐにその視線を受け止め『理由を教えてください』と、口を開く。

「なんの?」

「どうして、魂を獲るのですか?」

「あいつは《願望機》を使ったから」

「その処理は私たち魂魄管理局の仕事です」

「本気で言ってるの……あんた。死神になりたての新人?」

「は、はい、そうですけど……なにか問題でも?」

「なるほど……じゃあ、知らないわけね」

「な、なにがですか……」

「あなたが所属してる管理局の《闇》よ」

「闇……な、なんのことですか？」

「魂魄管理局はふぬけよ……甘い汁をすすって《願望機》を私物化している」

「ど、どういうことです……」

「これ以上はダメ」

「は、話してください！」

「知りたい？」

「はい」

「じゃあ……わたしを倒したら教えてあげるよ！」

ツインテールの少女は月詠つぐよみを抜刀し死神の少女に向け刀を水平に薙ぐ。

「な、なんでそうなるんですか!？」

死神の少女は持っていた自身の身長よりも長い大釜で刀撃を受け止める。

「お話したいんでしょ!？」

少女は刀撃を間隔をあけずに連続で死神の少女に刀を薙ぐ。

「そ、そうですけど!」

死神の少女も迫りくる刀撃を大鎌を巧みに操りすべて受け止め、またはいなす。

「じゃあ、わたしに勝ちなさいよ!」

「そつ、その言葉忘れないてくださいね!」

死神の少女は刀をはじめ黒い翼を羽ばたかせ空へと飛ぶ立つ。

「夜の闇で死神に戦いを挑んだこと、後悔してください」

少女は人差し指を天へとかけ『封印血界』と叫ぶ。自分の血を媒介にして空間を世界からずらす魔術は死神魔術の一つ。掲げた人差し指から赤いゆらめく光が発生、

そしてはじけ空間に解け交じり合っていく。そして死神の少女は翼

を大きくはばたかせ闇と同化し、そのままツインテールの少女の視界から消えた。

「血界けっかいで消えた……うつん、違う……か！」

振り返り自分の真後ろを月詠つきよみで一文字に薙ぐ。

「な、なんで……!？」

闇から真後ろから出現した死神の少女は驚愕の表情で夜の空へと羽ばたき逃げる。

「あらら、お得意の闇天道をやぶられちゃったね」

上空にいる死神の少女に不適な笑顔を浮かべる。

「どうしたの？ そんなに闇天道を見透かれたのがショックかな？」

「こ、魂魄管理法八十五条。『死神以外の者が魂を蒐集する行為を禁ず』に於いて……あ、あなたを拘束します……」

いまだに動揺を隠せない死神の少女は再び翼を羽ばたかせ黒い翼を撒き散らし闇と同化する。それをみたツインテールの少女は右手を腰に当て『ふう』と息をつくき左手を真横に突き出し蒼い炎を発火させる。

「うそ……」

ツインテールの少女の左手の先には青ざめた死神の少女が闇から出現していた。

「そろそろ、待ち合わせの時間だからわたし帰るね。それじゃ」

ツインテールの少女は左手に発火させている蒼い炎を握りつぶす。潰された蒼い炎は光を発光させ死神の少女はまともにそれを見てしまった。

「あつ！ しまっ！」

「じゃあね。楽しかったよ」

少女はその場から大きくジャンプし死神の少女から離れそのまま月詠つきよみを振り下ろす。少女に斬られた空間を起点に亀裂が走りガラスのように一点が割れた。

「うそ……」

先ほど同じ言葉を吐き死神の少女は砕けた空間を……自分が作っ

た『血界』を見た。その血界の境界からツインテールの少女が走り去っていくのが見えた。

死神の少女はまたもどこから出したか、わからない黒い子ぶたのぬいぐるみ三匹に『お願い追って』と命じる。それに答え三匹のぬいぐるみは小さく黒いこうもりの羽をはばたかせツインテールの少女を追う。

(使い魔?……あの死神……見た目より意外とやるわね)

小さな子ぶたのぬいぐるみにコウモリの羽が生えたようなかわいい使い魔三匹が近づいてくる。

(また……でもちよつとあのブタカワイイじゃない……)

子ぶたのぬいぐるみにコウモリの羽が生えたようなかわいい使い魔三匹を確認し、路地裏に着地し戦闘態勢に入る。逃げの一辺倒だった少女が戦闘態勢に入るの理由は理由があつた。

使い魔を通して現在の場所が知られるからだ。それを防ぐために今あの使い魔を倒す必要がある。

少女は鞘に手をかけ月詠を抜き。正眼の構えをとり使い魔に向かって走り出す。

「はあっ！」

掛け声とともに斬り出される一閃。すれ違いざまに使い魔の一匹をあっけなく斬る。

斬られた使い魔はまるで溶けるように闇に同化して消えた。

「残り二匹！」

かわいい子ぶたの前足から無数の闇の弾が少女に向かって打ち出される。ツインテールの少女は走りながら右左と軸移動でかわし徐々に使い魔との距離を縮める。

さらに加速を早め一気に間合いを詰め加速を止めないまま横払い一閃で使い魔を仕留める。先ほどと同じように闇に溶けていく使い魔少女は加速を緩めないまま後方にいた

最後に一匹に走りこんでいく。

「これで……最後おおおおおお！」
気合とともに放たれる下からの袈裟斬りの一撃は見事に使い魔を一刀両断していた。そして、闇に溶けるように斬られた子ブタは消えた。

魂を奪うもの・最終幕【器と選定】に続く

第二幕【魂魄管理局】（後書き）

こんにちはとこんばんは間宮冬弥です。

今回の作品を最後まで読んでいただきましてありがとうございます。

この魂を奪うものは次回で最終話となっております。やはりこの『魂』をテーマにするのは『無謀だったな』と、後悔しております。なにぶん『不死と死神と』と同じ感じにならないようにしないといけないプレッシャーがありましたので。

ちなみに、同じ死神という存在が出てくる『不死と死神と』とは物語としての関連性はありません。まったく違う世界観なので『不死と死神と』には魂魄管理局はありません。死神としての役割も違います。

一応次回が最終話です。よろしかったらこちらも読んでいただくと嬉しいです。

では、失礼します。

最終幕【器と選定】（前書き）

前回の簡単なあらすじ。

死神の少女を振り切り蒼い炎を使う少女はある人物と待ち合わせていた。

魂を奪うもの

最終幕【器と選定】

「もう、追ってこないか……」

少女は月詠つぐよみを鞘に収め《ありがとう。月詠つぐよみ》と言つと月詠つぐよみは真つ黒い液体に戻り地面に落ちた。

「あの死神……わたしと同じ年くらいだったかな……」

少女のいたであろう後方を眺め少女は呟いた。

「お……い、魂の蒐集しゅじゅうは終わったか？」

上空からの声にツインテールの少女は声の主へと視線を向けた。

「あ、お館さま……」

上空にはかなりの旧型の小型飛空艇であるウイングバイパーにまたがったお館様と呼ばれたアゴにヒゲをたくわえた筋肉質な大きな男が乗っていた。お館様は筋肉で覆われた大きな手で大きく手を振り少女に向ける。

それに答えるように少女も大きく手を振る。

「どうだった？ 順調に魂は蒐集できたか？」

強風を撒き散らしながらウイングバイパーを下降させお館様はツインテールの少女に訪ねる。

「ええ、まあ……」

「ん、どうした？ 歯切れが悪いな？」

少女はお館様のウイングバイパーの後ろにまたがりバツの悪そうに答えたのだった。

「死神に会いました」

「死神に？ まさか、魂を取り返されたのか？」

捲くし立てるようにアスカに言うが「いえ、それは大丈夫だったんですが……」とアスカは答える。

「なんだ？ どうしたんだ？」

「びっくりしました。わたしと同じ年くらいの女の子だったんですよ。あの死神」

「なんだ？ あれか？ ちょっと親近感がわいたか？」

お館さまは若干ニヤつきながらアス力を横目で見ると

「いえ、そういうわけじゃないんですが……なんか、似合わなかったなって。死神になんかならずに普通にすごせばよかつたんじゃないかなって」

夜空を見上げお館さまがかるうじて聞き取れるくらいの小さい声で言った。

「なんだ。その死神が気になるのか？」

お館さまはウイングバイパーを起動させ辺りに強風を起こしながら上昇していく。少女は死神がいるであろう後方を見つめていた。

「気になるというか……っ！」

「ま、待つてください！」

その時、空間から『闇天道』で空間転移してきた少女と目が合う。「死神！？」

お館さまが死神の姿をするとツインテールの少女は『先に行つて下さい！』とお館さまに告げウイングバイパーを飛び降りた。空中で黒い玉を具現化させそのまま握りつぶし黒い液体が月詠を形どる。

「しつこいよ！ 死神イ！」

屋根に着地し月詠を抜刀し、駆け死神に斬りかかる。

「魂を返してください！」

斬りかかった少女の刀撃を大鎌で受け止め、訴えるようにツインテールの少女に懇願する

「諦めなさいよ！ あいつは願望機を使ったのよ！」

その訴えをツインテールの少女は一蹴する。

「その魂の浄化と救済、及び判決は死神たちの仕事です！」

「その仕事を放棄してる死神にわたしたちが代わって蒐集してるのよ！ 文句があるなら管理局に言いなさい！」

刀を引き下から斬りあげるがそれも死神の大鎌に防がれ傷を負わせるにいかない。

「でも、でも！　なんで殺さないといけないんですか！？」

「魂を抜き出すためよ！」

「そんな……強制的な行為は……やっぱり納得できません！」

大鎌をまっすぐ振り下ろしアスカに攻撃するが月詠で軸をずらされいなされた。体勢をくずした死神の少女にアスカはまっすぐに蹴りを放ち死神の少女の腹部に直撃した。

「アスカもういい！　ここは撤退だ！」

ウイングバイパーを下降させお館さまの号令にアスカと呼ばれたツインテールの少女は刀を振り下ろしバックジャンプで距離をとる。
「アスカ乗れ！」

低空飛行でアスカのもとに寄ってきたウイングバイパーにアスカは飛び乗りそのまま上昇しその場を飛び去った。死神の少女は強風に阻まれながらも上空にいるアスカに叫んだ。

「待つて！　待つてください！　お願いです！　必ず魂の解放をしてください！」

死神の少女は『お願いです……魂を解放してあげてください……』と、まともに蹴りを食らった腹部を押さえ今にも泣き出しそうな声で空を見て呟いていた。

「なあ、アスカ」

「はい？」

体をすこしずらしお館さまの声に耳を傾ける。

「今の死神。騎士がいなかったな」

「そっういえば……」

死神と騎士とは死がふたりが分かつまで一心同体。その騎士がいなかった。アスカは少女と出会った時の事を思い出していた。アスカの記憶が正しいならばあの少女はひとりだった。

「騎士がいれば俺らやばかったな」

「確かに、そうですね」

「でも、なんだな。あの死神とお前なんとなく気があいそうだな？」

「ちよつ！ なに言ってるんですか?!」

少女は身を乗り出しお館さまの横顔に訴える。

「ははっ！ まあ、もしお前が騎士に選定されたならいつでも『黒染めの桜』はその死神を歓迎してやるぞ」

その訴えにお館さまは豪快に笑い飛ばして少女に返した。

「何言ってるんですか？ 死神は敵ですよ?」

「お前を騎士として選定した死神だ。きっと俺たちの心強い味方になっってくれるさ」

「それが……あの先読みの予言したことですか?」

「はっはっ！ まさか。あいつは『先読み』なんてたいそうなやつじゃないさ」

少女の口にした先読みという言葉にお館さまは再び笑い飛ばす。

お館さまは大きな声で笑いウイングバイパーを加速させる。それに気づかなかつたアス力は突然の加速に舌を噛みそうなりながらもしながらも『それもそうですね』とお館さまに返したのだった。

／管理局にて

「一人だけ……騎士にしたいひとがいます」

蒼炎の少女との出会いから一日たったある日。死神の少女は三年以上の同じ赤い髪に灰色の瞳を宿した兄にそう告げた。ここは魂魄管理局三階にあるカフェルーム。少女は冷たいアップルジュースを一口すすり兄の『お前は騎士を誰にするのか決めたのか』という問いに答えた。

「そうか、ならば早急に会って騎士として宣告したらどうだ」

「だけど、そのひとはどこにいるかわかりません……」

「はあ?」

少女の兄はコーヒートを口に運ぶ動作を止め少女の回答に疑問符を返す。

「どこにいるかもわからないヤツを騎士にしたいのか? どんなヤ

「ッだそいつは？」

兄はコーヒーを口に運び一口飲む。

「出会い是最悪で一方的でわたしの闇天道を一瞬で見破りなおかつ血界を砕き、使い魔を一瞬で倒し魂を奪うです」

「なっ、魂を奪う！？ お前そんな違法者で、でたらめなヤツを騎士にしたいのか？」

コーヒーを噴出し。兄は妹を奇異の瞳で直視する。その兄の視線を妹は強い意志で受け止め「わたしはその人を騎士にしたいです」と兄に宣言した。

「本気か？」

「はい」

まっすぐな瞳で、決意の込めた視線で妹は兄を凝視する。

「だけどな、お前の『闇天道』と『封印血界』を破り魂を奪う違法者を騎士にできるとは思えんぞ俺は」

「わかっていきます。わかっているからこそ私はあの人を騎士として迎えたいんです」

「ずいぶんとそいつを買っているんだな？」

コーヒーをすすり兄は妹アリスティアの話聞く。

「……あの方は管理局はふぬけと言いつちました。正直ショックでした……」

「管理局が？ ますます騎士としてふさわしくない言動だな。なんでそんなヤツを騎士にしたいんだ？」

「あの人は騎士としてふさわしいと思います」

「その理由は？」

「誰よりも優しく、人の死を悲しみ受け入れるとても強い人だからです」

その時、少女はあの時出会った蒼炎の少女を顔を思い出していた。その顔は今にも泣き出してしまいそうな弱々しい、深い悲しみに満ちた表情だった。

「そんな理由で騎士にするつもりか？ お前は」

妹から訊いた騎士の理由に呆れた兄はコーヒーを一口すすり鋭い視線を妹に送り言葉を遮る。妹は強い決意のまなざしを兄に向け『お兄ちゃんも甘い汁をすすってるの?』と問うが兄は『なんのことだ?』と返す。

「お兄ちゃんは甘い汁をすすってふぬけになっているの?」

「なにが言いたい?」

「お兄ちゃんは管理局をどう思ってるの?」

「ただの職場だ」

「……じゃあ、上層部をどう思ってる?」

「さあな?」

「不正をしてると思う?」

「さあな」

「願望機を私利私欲の為に使っていると思う?」

「さあな」

「……わかりました。失礼します」

死神の少女は席を立ち管理局について何も語らない兄に一礼をし、背を向ける。

「アリスティア。悪いことは言わない。お前は言われた通りに動けばいい」

「言われた通りに動けばいい? じゃあ、『願望機使用者に関わるな』というこんな伝令に従えというんですか? レティス一級執務官」

兄を役職で叫んだ死神の少女アリスティアは管理局からの支給品の小型通信端末を兄に突き出す。レティスはそれを受け取るとアリスティアは背を向け兄から去っていった。

小型端末は女の子らしいかわいいたデコレーションが適度にほどこされていてその画面には『アリスティア三級補佐官に告ぐ。今現在感知した願望機使用者への接触をすることなかれ。この願望機への対応は上層部に一任されている。貴公は直ちに管理局で待機されたし』という通信メールが映し出されていた。

「気弱なお前が騎士として選んだやつだ。きつと力になってくれる。けどな……アリスティア。お前が考えているほど管理局（こく）の根は深いぞ……」

レティスは伝令メールを削除し小型通信端末をジャケットのポケットに静かにしまった。

「正義感の強いところと人を見る目は親父にそっくりだな……」

レティスはコーヒーを一口すすり自分の小型通信端末をカバンから取り出し起動させる。メール画面を起動させ受信メールボックス内にある『管理局』という名目のフォルダを開く。

そこには『レティス一級執務間に告ぐ。今現在感知した願望機使用者への接触をすることなかれ。この願望機への対応は上層部に一任されている。貴公は直ちに管理局で待機されたし』という通信メールが映し出されていた

「まったく同じ文面……やはり、管理局（こく）でなにかが起こっているか……」
レティスは何かの大きな流れを感じ取っていた。

管理局はいつもと変わらない日常、変わらない雰囲気を作り出している。

（箱庭だな……与えられたことだけを淡々とこなす人形……まあ俺も同じか……）

レティスは周りにいる同僚や上司を見て思う。そして自分も同じと再認識した。

「レティス、すまない遅れた」

「いいよ、ちょうど終わったところだ」

「？」

レティスの元に現れた男顔に眉をひそめレティスを見る。黒髪黒瞳の男はレティスと同じ年くらいの青年で短い黒髪の顔つきが穏やかで、とても優しくそうに見える好青年だった。

「どうだった？」

「やはり、レイイスの思ったとおり登録にないシリアルナンバーの願望機があった」

男は先ほどまでアリスティアが座っていたイスに座りレイイスと話し始める。

「そうかじゃあやっぱり……」

「ああ、願望機が『複製』されている可能性がある」

男はレポート用紙の束をレイイスに差し出した。

「……一体何を考えている……そんなことをしてなんになる……」

レポート用紙の束を受け取ったレイイスはその束をめくり内容を確認した。

「なあ、お前は何を考えているんだ？」

「何のことだ」

レイイスは男を一切見ずにレポート用紙に書かれた内容を熟読している。

「お前、何か企んでいるだろ？」

「何のことだ？」

「俺はお前の騎士だ。命を共にするものだ」

レイイスの騎士、ユキトはレイイスを睨みはつきりと『俺はお前の剣だ』というがレイイスは『わかつてるさ』と答えるが相変わらず眼をあわせずに内容を読んでいた。

「わかつてない。お前は優しいやつだ。きつと一人でやるつもりだろ？」

とぼけるレイイスにユキトは引かずに食い下がる。

「何を言っているかわからないな」

真剣な表情でまっすぐな眼差しを一切無視しレイイスはレポートの文字を目で追いかけている。

「わからなくて結構。だが、これだけは覚えておけ。何があっても俺はお前を護る。何があってもだ。それが……死神の騎士としての使命だ」

そして、ふたりは何も話さずにただ、沈黙が包んでいた。

「どうして……あなたはあの時泣きそうなくらい悲しい顔をしていたの……」

アリスティアは夜空を見上げ夜の街で出会った蒼い炎を使う少女の事を思い出していた。

夜の空に浮かぶ双子月は手を伸ばせば掴めそうなくらい大きく見えた。

魂を奪うもの【器と選定】・完

オマケ／邂逅への回帰

「^{エリクサー}神秘の万能薬？……これが……こんなのが神秘の万能薬だというの！」

傷つきながらも辿り着いたその神珠の森の最奥は骨と髑髏^{どくろ}が埋め尽くす暗い暗い泉ある場所だった。

耳を澄ませば怨霊の断末魔の声が聞こえてきそうだった。吐き気が覚えるその場所をアスカはがただただ、呆然と立ち尽くしていた。
「アスカ！ ここには神秘^{エリクサー}の万能薬はないぞ！」

「お館さま……って、そいつ！」
アスカの元に現れたお館さまが背負っていたのはあの時の死神の少女だった。だいぶ傷ついていて気を失っていた。

「ど、どうしたんですか？！ その子！？」
お館さまに駆け寄り背負わされている死神とお館さまを交互にみた。

「どうやらデマの情報を掴まされたようだな。この死神はその事を知らせてくれたんだ」

「なっ！ デマあ！？」

険しい表情でお館さまを見て泉を睨む。

「アスカ、とりあえずここから出るぞ！ みんな入り口で待っている」

「はっ、はい！」

「ま、待つてください……」

お館さまに背負われた死神の少女、アリスティアが目覚まし弱々しくお館さまに言った。

「お、目を覚ましたか？」

「すみません……わたしを下ろしてください……」

傷だらけのアリスティアは弱々しくお館さまに告げた。

「おいおい、こんな気味悪いところに用なんてないだろう？」
心配そうに背負っている死神を横目で見た。

「すみません。わたしには見過ごすことはできません……」

そう言いアリスティアはお館さまの背中から降り。腕の傷から血を左手の人差し指で掬い一滴垂らす。その血が空中で停滞、膨張し大きな鎌へと変貌していく。血を媒体に具現化した鎌を手に取りアリスティアは泉へと鎌を杖代わりにしながら歩いていった。

アスカを横ぎる時、よろよると歩いていたアリスティアがバランスを崩しアスカにもたれかかかってしまった。

「おい、ムリするなよ。お前さん『風王の導き』を通ってきたんだろ？！」

お館さまが駆け寄ってくる。

「えっ！ あそこを通ってきたのあんた！ 大丈夫なの？」

『風王の導き』と聞きアスカはアリスティアの顔をまじまじと見る。だがアリスティアはアスカに弱々しく微笑み返した。

「だ、大丈夫です…… やっぱりあなたは優しい人ですね…… 思ったとおりです……」

アスカはアリスティアを心配そうな顔で見ている。そして、そんな顔で見ているアスカにアリスティアは笑顔を見せている。だが、

眼を開き毅然とした態度で言葉を紡ぐアリスティア。しかし、その足はふるふると震えていたのはアスカやお館さまには気づかなかった。

「これからお前たちを天へと導く。私の邪魔をするもの、私の従者に憑依するものがいたなら一生浄化できないものと知れ！」

アリスティアは大鎌を泉に浸し再び眼を閉じる。そして逡巡の後、眼を開き大鎌を振り上げ空を切り裂く。切り裂かれた空、それは残留思念魂。大鎌で斬られた思念魂は光を放ち小さな粒子となり上昇しながら消えていく。アリスティアは的確に思念魂を切り裂き光の粒子を上昇させていく。気づくとアリスティアは光に包まれていた。

「綺麗……」

アスカが不謹慎にも誰にも気づかれぬほど小さな声で言葉を漏らす。魂の救済。それはまるで優雅に舞う踊り手のようだった。そして、魂を浄化することにアリスティアの黒い羽が一枚ずつ真っ白な羽になっていく。

舞うアリスティア。

浄化され光の粒子となる魂。

キラキラと輝き舞い上がる水の雫。

そのすべてがまるで神秘的で幻想的な光景だった。

最後の魂が浄化される頃にはアリスティアの漆黒の翼が純白の翼になっていった。

「ゆっくりおやすみ……それと……ごめんなさい……」

背中 of 純白の翼が飛び散りその羽が空を舞う。舞っている羽は光

の粒子になり消滅する。翼の支えが無くなったアリスティアは水面に倒れ水中に吸い込まれていく。それを見たお館さまは泉に飛び込もうとしたが、それよりも先にアス力が泉に飛び込んでいた。

(冷たい……冷たいよ……体が動かないよ……)

水面から見える双子月がゆらゆらと揺れ形が安定しない。沈み行く体の制御がままならないままアリスティアは泉の底へと落ちていく。

(水の中から見ると……双子月って綺麗なんだ……)

双子月を見ながらアリスティアは死ぬかもしれない状況でそんな事を思う。ふとよく見るとゆらゆらと揺れる蒼い月から黒い物体が落ちてきている。その物体はまっすぐにアリスティアの元まで寄ってくる。

(あつ……)

その物体は魚でもサメでも人魚でもない。黒くて長い髪を二つに束ね蒼い色の瞳を宿した少女だった。その少女は腕を伸ばし手を差し伸べている。

(わたしを……助けに来てくれた……)

手を差し出しアリスティアの腕を少女は掴む。

(もう、この手を離さない……)

そして、アリスティアの意識が闇へと堕ちていった。

「わたしの……騎士になって……ください……」

目覚めないアリスティアは先ほどから寝言でこの言葉を繰り返して呟いていた。

「なあ、アスカ」

「はい？」

「やっぱりこの言葉、お前にいつてるんじゃないのか？」

「わかりませんよ。本人が起きないと真意がわからないですし」

アスカはお館さまをチラッと見て前方に視線を移す。

「でもなあ、どう考えても俺に言ってるとは思わないぞ」

「そんなのわかりませんよ？」

「でもなあ、お前が助けてからその子、手を離そうとしないじゃないか？」

お館さまはアスカとその手を繋いでいるアリスティアを交互に見る。

「うん……」

泉の中からアリスティアを助け出してから入り口目指し歩き続けて約三十分。気を失ってからアスカの手を離そうとしないアリスティアがお館さまに背負われていた。アスカはとうとうなんとか離そうと努力したがそれでも離す事ができず結局手をつないだまま森を歩いていった。

「もしかして、実はもう起きてるんじゃないですか？」

そういいアスカはほっぺをつねる。アリスティアは「うん、うん」と唸るだけで起きる気配はなかった。今度はぶんぶんと手を振り回すがそれでもしつかりと握られて離れなかった。

「なあ、試しに騎士になりますって言ったらどうだ？」

「ちよっ！ なにいつてるんですか？」

驚きの表情でアスカはお館さまを見る。

「もしかしたら離れるかもしれないぞ？」

「ホントですかあ〜」

「いいから言ってみ」

半信半疑のアスカ。面白半分のお館さま。怪訝な面持ちでお館さまとアリスティアを見て、そしてアスカはひとつ咳払いをし口を開き言った。

「わたしは、あなたの騎士になります」

「.....」
「.....」
数秒の沈黙。

「やっぱり、離れないか」

「ですよね」

そしてふたりは眼を合わせ『あはは』と笑いあう。

「今の言葉.....本当ですか.....」

「うおう！」

「ひゃあ！」

ふたりがそれぞれの驚きの声をあげアリスティアを見る。

「わたしの騎士になってくれるって.....本当ですか.....？」

「ちよっ！ 眼を覚ましたならこの手を離しなさいよ！」

アスカは立ち止り手を離そうとするがアリスティアは一生懸命抵抗し離そうとしない。

「答えてください.....」

「なにがっよ！」

「わたしの騎士になってくれますか.....？」

満身創痍のアリスティア。だが強い意志と凜と眼差しを向ける。

アスカは何も答えずその眼からそらしうつむく。

「あなたが必要なんです.....あなたを騎士にするまで.....この手を離さない.....もう逃がさないです.....」

「.....」

それ以上何も言わずにアリスティアの意識は眠りに落ちた。

「あっ.....」

小さく呟くとスルリとアリスティアとアスカの手が離れる。

「離れたな」

「.....」

離れた自分の手を見つめアスカは再び手に取り強く握り返す。
「いいのか？」

ふたりは森の入り口を目指し再び歩みを開始する。

「わたしはまだ、騎士にならないって答えてないですから」

「お前を必要としているぞ」

「わがしは人殺しです。騎士の資格なんてないです」

「だが、それは願望機を使用した者がいたからだ。お前は正しい事をしている」

「でも、人殺しですよ」

「願望機を使用したものその時点で人間ではない。いずれ人間ではなくなる。そうなったらもう遅いんだ。オレたちは死神じゃない《殺す》という方法でしか魂を救済できない」

「そうですね……」

アスカはチラツと眠りに落ちているアリスティアを見る。

「わたしが騎士になると……管理局の目が黒染めこくぢめの桜に向くんじゃ

……」

「そうだな。それが問題だな……」

「この死神が管理局から離反するかして管理局と離れてくれるとい
いんですけどね。そうすれば人を殺さなくても済むのに……」

アスカは伏し目がちに悲しそうに呟いた

「……」

その問いにお館さまは何も言わずにアスカの頭を乱暴になでた。

「お~~~~~い！ お館さま~~~~~！ アスカ~~~~~

~~~~~！ こつちだ~~~~~！」

森の入り口に到着するとすでのみんなが集まっており大きく手を  
振り自分たちの場所をふたりに示す。

「この死神どうしますか？」

アスカはもう一度ほっぺをつねる。『うん、うん』と返って  
くるだけだった。

「連れて行くさ。ケガ人を放っておくワケにもいけないしな」

「いいんですか？」

「お前はイヤなのか？」

「うん、でも死神ですよ？」

「ケガ人に死神、死神じゃないは関係ないだろ？」

「そうですね……」

「イヤならその手を離せ。こいつを置いていく」

お館さまはアスカとアリスティアを繋いでいる手を見てアスカを見た。

「……それは……」

答えに詰まったアスカの手はアリスティアの手をしっかりと握っていた。

「お前はやさしいヤツだ。ケガ人を置いてはいけないだろ？　じゃあ決まりだ。いいな」

「……」

半ばお館さまに押し切られた形になったがアスカはイヤではなかった。返事しなかったアスカをしり目にお館さまは早足でみんなの所へと向かった。アスカも手を繋いでいる以上一緒に歩く。

そして……アスカはアリスティアの手を離すことはなかった。

三週間後。

「遅かった……もう理性を失っているわね……」

「そうですね……」

夜空に双子月が輝く街。その一軒家の屋根の上でアスカとアリスティアは視界に入り込んだヒトとしての理性を失いつつある願望機使用者を見据えていた。元は人間だが今は破壊衝動が先行しており周りの壁を破壊し、人々に危害加えていた。

「これ以上街を破壊されないよう短期決戦でいきましょう」

「オツケイ、じゃあ、行って来る！　魂の救済お願いね」

「はい！」

アスカは屋根から飛び降りヒトだったモノへと対峙する。

「破壊活動は終わりよ！」

アスカは蒼炎を右の手のひらで発火させそのまま空中で停滞させる。

「いくよ。月詠<sup>つくよみ</sup>」

その言の葉が術語となり蒼い炎は煌きはじけ片刃の刀に姿を変える。

「アスカさん！ 五分稼いでください！」

「わかった！」

アリスティアの願いにアスカはチラリとも見ずに返事をし、ヒトだったモノへと駆け出す。

ヒトだったモノの強烈な拳の振り下ろしをアスカはジャンプでかわす。そして、そのまま刃を返し刀背<sup>みな</sup>打ちをヒトだったモノの脳天へ食らわせる。

「うごおおおおおおお~~~~~！！」

頭を抑えもたえるヒトだったモノにさらに追い討ちをかけるために着地したアスカは疾走し月詠<sup>つくよみ</sup>を一字に薙ぐ。脇腹を捕らえた一閃に苦悶の絶叫を上げるヒトだったモノ。

「ウリリイイイイイ~~~~~！！」

ヒトだったモノは走りアスカに向かい回し蹴りを放つがアスカは軽々とバックステップでそれをかわす。さらに拳を振り上げアスカに向かい殴りかかるがそれも軽々とかわされてしまう。当たらない攻撃に苛立ったのかヒトだったモノは攻撃速度を速める。

「ほらほら、どうしたの？ 当たらないよ」

アスカの挑発にヒトだったモノは拳だけだった攻撃に蹴りを織り交ぜて行った。

（どうやらまだ言葉は理解できるみたいね……）

「アスカさん！」

アリスティアの叫びにアスカは後方にジャンプ。アスカという壁がなくなるとその後ろから漆黒の翼を羽ばたかせたアリスティアが

低空飛行で近づきヒトだったモノへと大鎌を横に薙ぐ

大鎌で斬られたヒトだったモノの胸から複雑な模様が描かれた光の魔法陣が展開されその中心から真っ赤な紅い蝶がヒラヒラと優雅に飛び立った。

「アリス！」

その声を聞いたアリスティアは漆黒の翼を羽ばたかせ上空へと移動。

「彷徨える魂よ！ お前の抛りばはここよ！」

アスカは取り出した白い球体をとりだし紅い蝶をその白い物体。

正確には白いリングに着地させる。すると、紅い蝶はスウーっと白いリングに吸い込まれ消えいく。

「これでよしと！ アリス願望機使用者は？」

「大丈夫です。魂は取り出しもうヒトにもどってます」

アスカはそれだけを聞くと『じゃあ引くわよ！ もうすぐ管理局が来る！』とアリスティアに言い身を翻し走り出す。

「あ、待って下さい！ 管理局のヒトが来れば保護してくれますので。じゃあ、失礼します」

アリスティアはヒトに戻り気を失った男に律儀に頭をさげ漆黒の翼を羽ばたかせその場を後にする。

「いくよ！ 早く乗って！」

「はい！」

路地裏に隠してあった小型飛空艇ウイングバイパーを起動させ上昇する。

「スピードをフルまであげるからしっかりつかまってね」

「はい！」

アリスティアはアスカの後ろに座り腰をしっかりと抱きしめる。そして、二人は夜の空へと消えていった。

／????？

「願望機使用者の魂は回収できたか？」

「いえ、それが……」

歯切れが悪く中年の男は上司だろうか老人の顔色を伺い話を切り出していた。

「なんだ？ どうした？」

「それが……すでに管理局の者が到着したときには魂を抜かれた後です……」

「なんだと」

「意識不明の使用者は保護したのですが……いかがなさいますか？」  
「意識が戻り次第放り出せ。願望機の魂がなければ用はない」

「は、はい……では、そのように伝えておきます」

中年の男は高貴な服を纏った老人に頭をさげそそくさと部屋を後にした。老人は顔にしわくちやの顔をさらにしわくちやに怒りのあらわにしていた。

オマケ／邂逅への回帰 完

## 最終幕【器と選定】（後書き）

この作品を最後まで読んでいただいております。楽しんで頂けましたでしょうか？間宮冬弥です。

最終話ということである程度詰り込んでおきたい話になってしまいました。本当ならもう少し短くしたかったんですけどね……一応これでひとまず完結です。死神の騎士になった（？）アスカと死神であるアリスの物語は機会があったら書きたいと思います。ちなみにオマケに登場するアリスティアはすでに管理局を離れていきますのでアスカと行動を共にしていません。その部分を含めいずれまた。

では、少し長いあとがきとなってしまいました。これにて失礼します。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1643e/>

---

魂を奪うもの

2009年3月24日09時23分発行